運動で心と体健康に

豊里町でスポーツ体験会

「第17回登米市スポーツまつり」は10月９日、豊里公民館で開かれ、71人が参加しました。

まつりは、スポーツの楽しさを体感することを目的に開催。ボッチャやモルック、ラダーゲッターなど、計６種目のニュースポーツの体験コーナーや、体組成が測定できる健康づくりコーナーなどが設けられ、たくさんの参加者でにぎわいました。友人と来場した菅原みゑ子さん＝登米町下り松＝は「初めて経験するスポーツでしたが、簡単にできて年齢を忘れて楽しめました。健康測定では数値が良くてうれしかったです」と笑顔を見せました。

ボッチャでは、参加者同士がボールを投げたり転がしたりしながら一喜一憂していました。

芸術文化を次世代に

市民文化祭で成果を披露

「第15回登米市民文化祭」（登米市文化協会主催）が９月30日と10月１日、豊里公民館で開かれました。

展示発表では、書道や俳句、陶芸など13団体が作品を展示。ステージ発表では、２日間で30団体が日本舞踊、民謡、伝統芸能、フラダンスなど、68演目を披露したほか、市民文化祭初となる仙台フィルハーモニー管弦楽団の弦楽四重奏コンサートも催されました。来場した髙橋武比古さん＝中田町十文字＝は「俳句を出展したので妻と見に来ました。ちぎり絵や絵画など、素晴らしい作品が多く展示されているので、見に来て良かったです」と話していました。

今年は「つなぐ・つながる」をテーマに開催。次世代を担う未就学児や小学生も日頃の文化活動の成果を披露しました。

門出を祝い出発進行

人力車が新郎新婦届ける

「令和登米人力車会」は10月８日、迫町の津島神社で結婚式を挙げる佐々木宏吉さんと志保さんを人力車で式場まで送り届けました。

人力車による移動は、新郎新婦からの希望に、同会や登米市神社通り商店会が協力して実現。二人を乗せた人力車が近づくと、沿道からは歓声が上がりました。交通整理を担当した新田修平さん＝登米町辺室山＝は「新郎新婦の新たな門出を祝いたいという気持ちはもちろん、シティプロモーションにもつながると思って協力しました。これからも『人力車の走るまち』をアピールしていきたいです」と話しました。

志保さんは「地域の皆さんのおかげで、一生に一度の思い出に残る結婚式になりました」と感謝の気持ちを述べていました。

技術と物産が大集結

産業フェスティバル開催

「第16回登米市産業フェスティバル」は10月１日、迫体育館とエスファクトリー東北中江公園（迫中江中央公園）で開催され、約１万３千人が来場しました。

体育館内では、市内企業や学校などによる、生産品の展示やものづくり体験などが催されました。屋外には木工体験ブースや電気自動車の展示のほか、特産品の販売や飲食コーナーなどが立ち並び、市の魅力を発信。市内の産業を担う企業や団体がイベントを盛り上げました。家族で訪れた畠山卓也さん＝迫町山の上＝は「市内の企業などの製品や取り組みなど、初めて知ることも多く、とても充実しました」と話していました。

電子部品メーカーのロボットによるパフォーマンス。精密な動きを前に、こどもも大人も目を輝かせていました。

笑顔満点イモを収穫

幼稚園児と高校生が交流

「サツマイモ掘り交流学習」は10月25日、登米総合産業高校の実習畑で開かれ、同校農業科の生徒28人と、さくら幼稚園の年長組50人が、サツマイモの収穫に汗を流しました。

交流学習は、収穫体験を通して園児と生徒が交流し、農業や自然への興味と関心を深めることを目的に開催。畑から、さまざまな形や大きさのサツマイモが採れるたびに、こどもたちの歓声が上がりました。高橋幸也さん（産業高１年）は、「収穫に園児たちが喜んでくれたのでうれしかったです。栽培したかいがありました」と笑顔を見せました。

手に持ち切れないほど、たくさんの大きなサツマイモを収穫した園児たち。元気な声が響き渡りました。

市の産業振興に寄与

地域おこし協力隊を任命

「登米市地域おこし協力隊辞令交付式」は10月２日、市役所迫庁舎で開かれ、木工芸支援員として、熊本市出身の髙田由美さんと名取市出身の松浦秀平さんが任命されました。

本市では、2013年度から地域おこし協力隊員を受け入れており、今回で19人目の採用。二人は、市の農林振興課に所属し、津山木工加工研修施設などでの技術習得と、森林資源の活用やＰＲ活動などに携わります。任期は１年ごとの更新で最長３年間。松浦さんは「登米の地に根ざして、市を象徴する杉の木のように天高く成長していきたい」と抱負を述べました。

高齢化が進む木工芸職人の後継者不足が懸念される中、隊員の二人には新たな担い手として活躍が期待されます。